



集落営農組織化の実戦書を読んで

小野 智昭

集落営農に関する本が最近いくつか出版された。その中に集落営農を実際に組織しようとする読者を対象に書かれた実戦的な書がある。森本秀樹『新ここがポイント！集落営農「つくるまで」と「つくってから」』（農文協、2006年）がそのひとつだ。同書は、副題が示すように集落営農組織化にあたっての重要ポイントを40に整理しつつ、集落営農を組織化の前段階から法人化までステップアップさせる手順を具体的に示している。その中で、集落営農活動の奥行きをの深さを読みとった。

集落営農は地域の客観的・主体的条件に応じて多様な態様をとっている。その点、森本氏の整理は興味深い。集落営農を4つの発展段階＜共同利用→作業受委託・農地流動化→経営体の確立→法人化＞と2つの方向＜経営の高度化、農産物加工・都市交流などの高付加価値化＞に整理している。集落営農を生き成長する活動として、発展的・動態的な過程の中に位置づけているのだ。

ところで集落営農の多様性を規定する要因の1つは、農業従事者の確保状況だろう。個別の規模拡大経営や専任オペレーターという実働部隊を一定程度確保できる条件があるところでは、そうした営農の実働部隊を経営体として確立させる体勢がとれやすい。しかし農作業の担い手たるべき壮年人口が欠落しているがために、ぐるみ型の集落営農が組織されるような地域では、実働部隊を経営体として確立させる前途には課題が多かる。

兵庫県の専門技術員である森本氏は、後者のような条件不利地において集落営農の組織化を進めてこられた。その経験を踏まえて森

本氏は、集落営農の発展に共同利用というその端緒的段階をも明示的に含め、さらに加工・直売や都市との交流など地域資源を活用して幅広い年齢層が参加する活動を「高付加価値型」の方向として示されたのだろう。集落営農は低コスト化や担い手育成のみならず、コミュニティの再活性化、社会関係資本（ソーシャルキャピタル）の充実のために大切なのだと、氏は提案していると理解する。

集落と農家の関係についても興味深い提起をしている。集落の今後の農業を話し合う場合には、世帯主・経営主すなわち家を単位としてではなく、各世帯員個人を単位として意見を集約することが非常に重要だ、ということ強調していることだ。いわく、「“戸”ではなく“個”の意向が大事」、「集落営農ビジョンをつくる場合には、10年後に農業を担わなければならない若者や、家事や農作業に追われ、もっとも苦勞の多い女性の声など、ふだんあまり聞こえてこない意見を積み上げてつくるのが重要です。」（森本、56頁）。

農作業確保を農家単位ではなく個人単位で考える、そして個々人のエネルギーの結集により集落を活性化させるという実戦的な提案がされている。集落（ムラ）の農業を農家（イエ）の集合体ではなく、個人の集合体として考えていこうというこの提案は、集落や農家に関する従来の規範を大きく変更させることをも含意している。また世帯主の下でいわば抑圧的な位置にある跡継ぎや女性（妻、嫁）の独立性を保障していく活動の提起でもある。集落営農組織化の活動が、農業生産の活性化のみならず、イエやムラの新しい規範を形成する契機ともなり、農村社会の新たな変革をもたらす可能性が示唆されている。

最後に、同書末に氏が掲げる「農業・農村を動かす指導者」の像をここで紹介したい（森本、140頁）。

- ・つねに農業者と同じ目の高さでものを考え行動できる人
- ・つねに農業者とともに悩み、汗を流し、喜びをわかちあえる人
- ・つねにわかりやすく語りかけ、たまには遠くを眺められる人
- ・つねに絶対に負けない信念をもつ人